京都帝國大學新聞
號外
月二回(一日・十一日・廿一日)發行
定價 一部五錢(郵税共)
廣告料 九號活字一行金六十錢 記事中は右金額の二倍 掲載頁の指定は二割增
發行所 京都帝國大學 學友會新聞部 電話上九八〇 振替大阪七一二八
發行編輯兼印刷人 入山雄一

天に爆音 地に歡聲
祝日よ―輝やけ!
十七日は教官も學生も職員も
擧つて祝賀園遊會へ

本學創立して玆に卅四年、時代は進み人は變る、今や全員七千を擁する綜合大學となつた、この學園に、研究室に、圖書室に、事務室に閉ぢこもる者、教官も、學生も、職員も一つになつて祝ふべき創立記念日――大園遊會はあと三日に迫つた、ふりそゝぐ麗陽、輝やく若葉、どよめく喊聲、溢るゝ歡喜、これこそ大學オンパレードだ!、吾等はそこに隔てなき自己を見出し、渾然融和した一大團結を見出すであらう、まことに團結は力である、かくて歴史的の集りは、吾等の日記の一ページを作り、榮ある未來を約束するであらう、總べての準備は既に出來た、今は只その日を待つと共に、この團欒と交驩が、さらに、よりよき實を結ばんことを、衷心より祈るものである……

その朝八時――晴れ渡る五月の空にこだましてつるべ打つ煙火三發これが當日の皮切だ、九時――會場大グラウンド正門の柵がさつと八文字に開かれると、待ちかねた大衆はなだれを打つて殺到する、しばらくはたゞ人、人、人の流れである、十時――ほがらかな第一鈴が鳴り渡ると、突如場の一隅から劉喨たる「君ケ代」が全會場に響き渡り、諸員敬禮のうちに長くも秩父宮殿下御下賜金によつてつくられた大國旗が、サラ〳〵と中天高く掲揚され、颯爽として薫風にひるがへる、やがて次の順序で式が始まり、それが終るとすぐ園遊會だ、各種模擬店は一せいに店を開いて客を待ち、ページエント、レビュー、萬歳と餘興の數々は、こゝを先途と撩亂の繪巻をくりひろげる、かくて晩春の一日を天に胸とゞろかす祝賀機の爆音、地に歡聲のわくところ、我等の祝日よ、燦として榮光にかゞやけ!

祝賀式次第

午前九時開場―十時開會
開會の辭　大野熊雄
式辭　新城總長
教職員總代祝辭　松本均
卒業生總代祝辭　淺山忠愛
在學生總代祝辭　野上智賀雄
有志祝辭　……
閉會の辭　三澤糾

辨當ご飲物の外に記念手拭を

當日の御馳走は左記の如く、各模擬店で券と引かへに渡される
▽……辨當
▽……酒
▽……ビール
▽……サイダー
▽……おでん
▽……紅白まんぢう
尚この外大學の徽章のはいつた記念タオルを渡すことになつてゐるが、これは白井手拭店が註文を受けて特製したおぼろ織上質のものである

申込は今日締切る
午後四時迄に發行所へ

園遊會の切符は、辨當その他の準備の都合もあるので、今十四日午後四時を以て申込を締め切ることになつてゐるから、教授も學生も職員も、お忘れなく右時間までに左記箇所の内最寄便宜の所へ申込んで會費引かへに切符を受取られたしと
▼各學部事務室
▼學生課事務室
▼學友會事務室
▼大學病院事務室
▼寄宿舍事務室
▼購買組合賣店(正門西)
▼地下室食堂

飲みものは一本にかぎる

模擬店で渡す飲みものは酒(一合瓶)ビール(小瓶)サイダーの三種であるが、一人に三本渡すのではなく、その內自分の好むもの一本を選擇するので、これは切符を買ふとき必らず、その內のどれか一つを指定して、その切符を受取られたい

學生は八十錢 從來より二割安

會費は從來教授卒業生二圓、學生は一圓だつたが、今回は左の通り値下げした
▼學生生徒　金八十錢
▼職員及卒業生(但し學內)　金一圓
▼教官、高等官同待遇者及卒業生(但し學外)　一圓五十錢

「菊水」でも切符を發賣

學外にある卒業生の便宜を計るため京都四條大橋「菊水」でも切符を賣るから、散歩のついでにそこで買はれてもよいことになつた

レビューに出演する　里見清子

空から―お芽出たう!
大阪から朝日機の祝賀飛行

前回の園遊會には松下飛行士の操縱する大每機が空からの祝辭を贈つたが、今度は大阪朝日が之を飛ばすことになつた、卽ち十時祝賀式開會直前爆音高く飛來した大朝機は上空から、本學總長宛村山社長からの祝辭を入れた通信筒を落下し、これを式場で讀みあげる筈になつてゐる

民衆娛樂―「萬歳」と「足藝」

吉本興行部一流の萬歳と瓶まはし足藝が新京極の花月亭から派遣されることの二組の民衆娛樂は定めてナンセンスなトピックをたんまりふりまいて、大衆のお臍の宿替へをさせることであらう、龜鶴の瓶まはし足藝は非常に危險な藝當で餘興中でのきはものである

余興順序

万歳足藝　午前十一時から五十分
レビュー　正午から約一時間
野外劇　二時から約三十分

東西の粋を―集めた
獨創のレビュー
木村駒子氏の藝術大學出演 新舞踊「波」が呼び物

アート・エキスチエンジをモットーとして日本と西洋との舞踊藝術の融和完成に精進を續けてゐる木村駒子女史は、最近市內一條小川に開設した藝術大學で、養成した舞踊團一行十六名を指導し、約一時間に亘つてレビューを出演する舞踊曲目は皆風變りのもの許りで斷然園遊會餘興の呼物となつてゐる、そのプログラムは

オリエンタルダンス(出演者四人)
西洋音樂の中でも日本人の耳に親しい曲、デザート・キラバンに合せて踊る、エジプト式、三角ダンス

出船の港(出演者五人)

露西亞ダンス ポルカマヅルカ(出演者二人)

日本舞(一人)

新舞踊「波」(出演者八人)
駒子女史獨特の和洋折衷新舞踊で「ダニューブの小波」「オンザシオーア」「越後獅子」の名曲を巧みに組合せて作つた曲である。

京都行進曲(出演者六人)

京小唄(出演者六人)

レビューを指揮する木村女史

盛況をきはめた昭和二年の園遊會

レヴュー出演者

出演者氏名左の如し
小西安江、日下部雅子、日下部敦子、押田房子、森あさの、下村富子、久冨ふく子、今井君子、西田文子、山田靜子、金森たへ子、佐々木芳子、三宅せつ子、下村愛子、中村よし子、里見清子(以上十六名)

天氣は大丈夫

當日の天候は?、一番氣になるのは天候であるが、毎年この頃は青葉若葉に、ふりそゝぐ陽光美しい五月晴れがつゞく――試みに京都測候所できくと、昭和元年以降五年まで五月十七日には一滴の雨さへ降つてゐないと言ふことだから先づ安心して差支ない

ページエントは
史劇「秀吉榮華物語」
日活時代劇部尾上卯多五郎 外三十餘名―出演

かつて一代の名優尾上松之助氏が「開城の日大石內藏助」を演じ、河部五郎氏が「忠僕の櫻」を演じて、かつさいを博したわが園遊會につきもの、日活野外劇は、愈々史劇「秀吉榮華物語」と決定した、舞臺は會場大グラウンドの東方小丘にしつらへた今を盛りの櫻の下で戀と劍の一大活劇が演出される、俳優は尾上卯多五郎始め十八名、はやし鳴物を加へて三十餘名の大一座になる、尚日活では前日撮影部長築山光吉氏が來學して下檢分をなし、當日は開幕直前日活撮影所長池永浩治氏が恒例により全會衆に一場の挨拶をすることになつた、當日の配役及梗概は左の如し

=配役=
太閤秀吉　尾上卯多五郎
淀君　淺野雪子
石田三成　久米讓
能狂言師順賀　尾上華丈
(實は光秀の臣進士彌平太)
光秀の遺子菊野　木の下千代子
小姓梢關彌　久松實
腰元　四人
從臣　六人
小姓　二人

秀吉に扮する卯多五郎

=梗概=
血腥い矢叫び砲おとも千成瓢の前に影をひそめ、永い戰ひの世も五三の桐に幕を閉ぢて、上下こぞつて天下泰平を謳ふ桃山時代の頃、秀吉は近習を集めて盛大な祝宴を櫻さき亂れる醍醐で開いた、山崎の一戰に敗れ憐れ小栗栖の露と消えて、京童の口々に三日天下と唄はれた明智光秀の遺子菊野は、腰元桔梗となつて、これも明智の殘黨で、能狂言師順賀と化けた進士彌平太と謀つて、ひそかに秀吉をつけねらつてゐた、然し菊野は秀吉の寵臣石田三成を人知れず戀してゐた、さうした菊野のいぢらしい心を、三成も知つてはゐたが、制度の掟は二人の戀を許さなかつた、二人の戀を知つた彌平太は、戀に惱む菊野に反省を促し、明智家累代の銘刀小鳥丸を渡した、豐臣の天下を祝ふ劍の舞が開始され列座の臣が舞に陶醉してゐる隙を見た彌平太は、突如秀吉に白刄を閃めかしたが、周圍のものにはゞまれて遂に縄目を……、その時菊野も秀吉に刄を向けたが、誤つたなく石田三成の爲めに捕へられた、戀に敗れ復讐に敗れた菊野は自害した、三成と菊野の戀を知つた秀吉は、女の心をあはれんで仲介の勞をとり、彌平太の縄をさへといた、ハラ〳〵とちる櫻の下で、菊野は三成に抱かれて微笑みながら露の身を散らした

淀君に扮する淺野雪子

雨天の場合は

當日萬一小雨でも斷然決行するが若し土砂降りの時は止むを得ず會場を本部踏上大ホールに變更してこゝで辨當その他を引かへる

諸外國の
大學祭

年に一度、全學教官、先輩、學生が一場に集つて、一日を團らんに過す創立記念祝賀園遊會が三年振りで復活されたのは非常に喜ばしい事である、この祝日に因んで英米大學記念祭の有樣をきくと

米國の大學

米國では年々特別の祝賀式は行はず、廿五周年五十周年といふ風にまとまつた大規模のものを行ふことになつて居り、普通は卒業式や對抗試合を利用してこれに代はる會合が催されてゐる、數年前に行はれたカンサスの醫科大學の創立五十周年祭は準備も一年程前から取かゝり、記念週間を設けて非常に大規模なものであつた、學內の催し物は展覽會、スポーツ等で、先輩學生共に和氣靄々として樂しむ、この氣分は單に學校內ばかりでなく學生の組織する學外クラブまでに及び男女各團體の一大交歡會を呈し、かうした機會を利用し如才なく先輩や一般との連絡を計る、かゝる懇親會の一面には種々の記念事業を企て、競技場、音樂堂等の建設に莫大な寄附を集め愛校心の具體的表現とする

ロンドン大學

ロンドン大學の創立百年記念は、一九二七年に十日間に亘つて行はれたが、これはゆゝしいある記念日だけに、佛獨米其他各國の大學代表者五百名程が赤靑のガウンをつけ參列、皇帝、皇后のお成りがあつて式を行つた、前二日で式を終り後一週間は毎日講演會教室の公開をなし、學生達は各々そのクラブでお茶をのみダンスをやる、勿論これ等の催しには多數の市民が加はるのであるが、祝賀式は甚だ簡素なもので、集つた寄附金は建築、設備等に用ゐられた

○

單に二校の記念祭を擧げたが、これ等の記念祭に較べると本學の記念祭は甚だ物さびしい氣がする、我々が我々の大學の記念日を祝ふ以上もつと進んで計畫し、熱誠を表はし、お互に親睦を計り理解を進める爲めに努力したいものだ、又この記念祭は單に大學のみのそれでなくもつとパブリシテイをもつものでありたい、少くとも全京都をあげてこれを祝ふ樣になればそれだけ本學が社會的にふみ出したことになりはしないかと思ふ

秀吉榮華物語
―史劇・一幕もの―

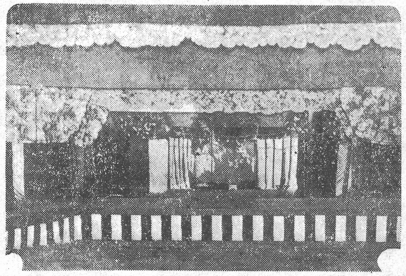
時……桃山時代
所……醍醐の花見の宴

舞臺正面櫻滿開の庭園、中央一段高く秀吉の御座所あり四面に緞帳を廻らす、櫻の大樹を連ねて五色緞子の幕を廻らし、上手寄りに赤毛せんを敷き、琴二面を配す、舞臺上手下手の附際に櫻の立木、一文字に釣枝よろしく、賑かなる囃子にて開幕……小姓腰元等數名賑かに踊りながら上手へ退場、腰元桔梗(實は光秀の遺子菊野)下手より登場して踊りを見送りゐたが、急に吐息をつき物憂げに櫻を眺め

(桔梗)踊り狂ふ春が來た……花は色づき誇らしく梢に咲いてゐる世間の春は美しく小鳥の歌も羨ましい……なぜ私には春がない(と心に祕めた戀に悶ゆる)

深く溜息して上手の方に、行くともなく歩みを運び又止まるこの時丁度下手より石田三成登場す、三成桔梗の姿を見て止まる、人の氣配に桔梗振り返り三成と知つて恥かしげに下俯く

(三成)桔梗殿何しに御座つた
(桔梗)ハイ……あの……餘りに花の美しさに……
(三成)(無言にて花を見上げる)
(桔梗)三成樣……
と(思ひ切つてかけよる)兩人上下に入れ代るそして桔梗は何事か言ひ遊る、三成も一寸顔を赤くする思ひ入れにて
(三成)わが君樣は
(桔梗)奧殿にて淀樣と睦じくお盃ごとを……
(三成)左樣か……(一寸考へて)御免……(上手に去らんとする)
(桔梗)三成樣……
(三成)(無言の儘立止り振返る)


史劇「秀吉榮華物語」の舞臺面

(桔梗)あれ御覽遊ばせ……櫻の花があの樣に咲き揃うてゐる風情眺める人に物言うてほしやと待ちこがれてゐる樣に……
(三成)春風春雨よく花を咲かしむ春雨春風亦花を散らしむ、昨日は知恩院、今日は仇なる世の習ひもござれば
(桔梗)なれど……春は春、花は花戀は……
(三成)戀は……?
(桔梗)戀は戀は……(苦しい思ひを泣くが如く訴へる)
(三成)(三成も同じ思ひを苦しげに)その戀は……戀はお家の法度……折角咲いたこの櫻もやがては散らう……桔梗殿
(桔梗)(無言の儘三成の顔を見守る)
(三成)靄のまゝの花こそ言ひ知れぬ美しさがござります(と一歩桔梗に近づく)
(桔梗)でもそれでは餘り……
(三成)つれない世間の目が……
(桔梗)三成樣……
人の來る氣配に二人ハツトなる丁度この時上手より順賀、實は明智の忠臣進士彌平太能狂言師態にて登場
(順賀)三成殿、君のお待ち兼ねでござります
(三成)おゝ順賀殿か、大儀……
行きかける、桔梗は一寸三成を追はんとする、順賀目を光らす、桔梗ためらふ、三成上手に退場、桔梗も本意なく下手に向つて退場せんとする
(順賀)桔梗殿ッ……
(桔梗)何か御用でござりますか
(順賀)(四方を見廻して一歩進み)御息女ッ……
(桔梗)コレッ……
桔梗も順賀も四方を注意して兩人舞臺の中央に近寄る
(順賀)御息女、三成奴は怨敵秀吉の寵臣、その三成と戀に狂つて亡き父君樣の恨みをお忘れなされたかッ……櫻の花は咲き誇り榮華にふける秀吉が、醍醐の夢は御主君が……
(桔梗)……
(順賀)その恨みを晴らさんために腰元風情に身をやつし給ひ……この彌平太も世を忍ぶ能狂言師とまで成り果てしは……皆わが君の御怨みを晴らし奉らんため……秀吉始め連なる仇敵、すきこそあらばと窺ふ身に、戀も愛も無い筈でござりまするに
(桔梗)彌平太――忘れてはゐません
(順賀)それでは今のていたらくは何事でござります……
(桔梗)……
(順賀)山崎村に樵夫となつて人目を忍び姫君に、日々劍術學問を御師範せしは今日の日を、待つて仇討つ爲ではござりませぬか
(桔梗)彌平太……赦して下され……つい女の淺はかから……
(順賀)切ない戀に取れても忠義が立てば武士の本懷……
と泣き崩れてゐる桔梗を眺め涙を人知れずふき心を鬼にして
(順賀)菊野ッ
と叫ぶ、桔梗は驚いて顔を振り上げる、順賀は容子を改め威儀を正しながら、上手へ居直り、短劍を取り出して
(順賀)余は惟任日向守光秀ぢや、この劍こそ明智家累代の寶刀小烏丸……これで怨み重なる藤吉郎の首級を擧げ、父が恨みを晴らすべし
初めて我にかへる桔梗は平伏なして順賀の前に進み劍を受取り
(桔梗)ハア……父君樣必ず〳〵お恨みをお晴らし致します
それを聞いた順賀は喜び、下手に下りて平伏なし
(順賀)姫君ッその御決心お忘れなく、怨敵秀吉醉ひしれて、舞に心を奪はるゝ隙を見て一氣に心臟を……若し仕損じなば其の場に於て御自害を……拙者も共に斬り死致し冥途の御供仕り、亡きわが君の御前にてお詫を致す所存
(其の時舞臺內にて)
(關彌)順賀殿、々々々
其聲に二人はハツとなりて左右に別れる小姓關彌上手より登場
(關彌)順賀殿やがて我君御出行で御座りまするぞ
と言つて上手に退場、順賀と桔梗は近寄りて耳邊でさゝやく、その時舞臺內にて
(大勢の聲)わが君樣の御出行
その聲を耳にした順賀と桔梗はあわてゝ下手に退場
(從臣一同)(舞臺內にて)御出行
上手より從臣數人登場して秀吉を出迎へる、そこへ上手より秀吉、淀君、石田三成、鄕關彌その外小姓腰元等數人登場、秀吉、淀君、小姓は中央御座所に著座、三成、關彌を始め腰元等は秀吉の左右に著席する

順賀に扮する尾上華丈と桔梗に扮する木下千代子

(秀吉)年々歳々花開き又ちるなれど、今年にました美事な春は又と無い筈ぢや、この秀吉が海內を統一し、平安の都はいやが上にも太平樂、御詫に依つて余が文武百官の長たる關白職に相成つたのぢや、皆心行くまで祝うてくれ
(三成)君飾の萬々歳をお祝ひ申し奉る爲め劍の舞を用意致して居りまする
(秀吉)近うよべッ
(三成)關彌それッ用意を……
(關彌)ハ……ア……(秀吉に一禮して下手に向ひ)次に控へし順賀殿早々これへ
下手より順賀登場して劍の舞を演じ居る內秀吉の隙を見て突如順賀は秀吉に斬つてかゝる、秀吉危く身をかはす、順賀流れて上手寄りに身構へる
(三成)方々御出向召され、順賀は謀反人ぢや〳〵
腰元共は騷ぎつゝ上手下手に退場する
(順賀)謀反人とは何事ぢや、小栗栖堤に無念の御最期を遊ばされし惟任日向守光秀の臣進士彌平太衞門の忘れ形見彌平太秀高だ、君御最期の其の日より臥薪嘗膽十餘年待つこと久し……秀吉公の首級をば今日この所で頂戴仕る
(三成)それ彌平太を召捕れイ……
彌平太は從臣と亂闘あつて上手に退場する、三成一人舞臺に殘り几帳前にあつて上手奧を見守りて氣を奇つてゐる此の時下手より桔梗忍びやかに登場する、靜かに進み短劍を逆手に几帳に近づく、三成かく知つて反對側の几帳上手よりの蔭より窺ふ、桔梗は秀吉に刄を向ける、三成矢庭に桔梗を突き離す、桔梗よろ〳〵とよろめき倒れる
(三成)御身は光秀殿の御息女であつたか
と溜息す
(桔梗)(俯いた面をあげ)戀は戀、仇は仇、亡き父君の御恨み秀吉公を仇として討ち果さねば……
(胸の悶え)戀のために子としての孝道は捨てられませぬ、三成樣あなたの御手でこの胸を……
(三成)忠と義を知る武士として果敢ない戀は捨てねばならぬ
(兩人暫く無言)此時上手より關彌かけ來り秀吉に一禮して
(關彌)謀反人明智の郞黨進士彌平太を召し捕りましてござります
と高らかに報告する
(桔梗)アッ……彌平太が
(三成)武運の果てぢや、時のさばきぢや、御息女今日は豐臣の春ぢやで喃
桔梗恨めしげに又悲しげに三成を見上げる花がちる
(桔梗)三成樣御免(と自害する)
(三成)おゝ(と桔梗を抱きあげる)桔梗殿
(桔梗)三成樣、櫻の花が花がちる兩人見上げるそして淋しく顔を見合はせる
(桔梗)ちる花、實のらぬ先にちる花は悲しうござります
(三成)なれ共花はいさぎよく、大和櫻の最期は淋しうも又美しいものでござります
桔梗淋しく悲しげに笑ふ、秀吉淀君靜かに几帳を上げそして進み出でぢつと見つめてゐる、三成始めてそれと氣づき頭を下げる
(秀吉)順逆の理はともあれ、父の仇としてこの秀吉に刄を向ける其の健氣さ、流石は日向の娘ぢや、天晴れ雄々しい女よ、不びんな者よ……
(三成)御叱りも無き君の御寛度情けの御言葉
(秀吉)何んの叱らう、三成予が仲介いたす、そちの妻として女の心を受けてやれ
(三成)はつ……(桔梗を抱き上げ)桔梗殿、君が御聲をきかれたか
(桔梗)(踊のいきにて)うれしう……あの世へ……
此時上手よりくゝられしまゝ順賀は縄取りの人々を引きずる樣に登場なし血に燃ゆる目にて
(順賀)姫君その有樣は何事ぞ、主君の恥辱を思はぬかッ……
三成靜かに桔梗の身體を廻して自害したる事を知らせる
(順賀)(ぢつと見てゐたがあつ)姫君……
どつと腰を落し無念の涙……
(秀吉)三成ッ……
(三成)ハ、ア……
(秀吉)彌平太は余が手づから成敗いたすぞ
と彌平太の背後に廻り縄を切る、彌平太は喜び桔梗に寄り添うて
(順賀)姫君ッ
一同悲痛の思入、櫻の花ちる
(淀君)あゝ櫻の花がヒラ〳〵と
(秀吉)桔梗の花も共にちる……
夕鐘が鳴る
(秀吉)鐘は無常を知らすよな
一同嘆きの內に靜かに幕

當日會場ではプログラム等は別に配布しませんから、本紙を御持參になれば便利です